

クレイギー・ハウス

The Craigie House

そしてロングフェロー、ウスター、ディケンズ、・・・

And Longfellow, Worcester, Dickens, ??

寺内 孝

Takashi TERAUCHI

1 クレイギー・ハウス

イギリスの冒険家ジョン・スミス (John Smith, 1580-1631) はヴァージニア植民地の開拓者であるが、1614年にかれがアメリカ北東部に分け入ったとき、そこがイングランドに似ていることからニュー・イングランドと呼んだ人でもある。今日、コネティカット、マサチューセッツ、メイン、ニューハンプシャー、バーモント、ロード・アイランドのアメリカ北東部6州を構成する地域だ。

ニュー・イングランドの中心地はマサチューセッツ州の州都ボストンである。この町の北側にチャールズ (Charles) 川が流れ、その対岸にハーバード大学を擁するケンブリッジ (Cambridge) があり、表題のクレイギー・ハウス (Craigie House) もここにある (図版1)。

クレイギー・ハウスの建築は1759年にさかのぼる。施主はイングランド出身の植民地事業家で、チャールズ・タウン植民地創設者のひとり、ジョン・ヴァッサル (c. 1625 - 1688) の子孫ジョン・ヴァッサル大佐 (Colonel John Vassall) である。かれは先祖から100~200エーカーの土地を相続し、その真ん中にこの邸宅を建てたのだ。だが時運は彼になかった。アメリカで1763年ごろから独立革命 (American Revolution, 1775-1783) の足音が聞かれるようになり、イングランド王党派に属した彼は帰国してジョージ3世の麾下に入る。

1775年4月、ボストン近郊のレキシントンでイギリス軍と植民地民兵が衝突し、6月、最初の激戦がボストン近郊のバンカー・ヒル (Bunker Hill) で繰りひろげられる。その後に大陸軍は、ボストンに駐留したイギリス軍を攻囲するのだが、その間の7月、大陸軍総司令官ジョージ・ワシントン (George Washington) が到着し、先述のヴァッサルの屋敷を接收して軍の司令部とする。それから9ヶ月後の76年3月、イギリス軍がボストンを撤退するや、ジョージ・ワシントンも4月に移動する。

そして数年後、当局はヴァッサル・ハウスを没収し (Green 318)、売却に付す。これをナサニエル・トレイシー (Nathaniel Tracy) という名の、ニューベリーポート (Newburyport) で私掠船を操って海賊行為をしていた商人が1781年に4,264ポンドで購入し、さらに86年にボストンの商人トマス・ラッセル (Thomas Russell) が譲り受け、¹ 次いで92年にアンドルー・クレイギー (Andrew Craigie, 1743-1819) が150エーカーの土地付きで3,700ポンドで入手する (Green 318-320; Longfellow 259-262; Johnson q.v. *Andrew Craigie*)。 ² ヴァッサル・ハウスはこうしてクレイギー・ハウスとなるのだ。この屋敷は既述のようにジョージ・ワシントンが司令部とした経緯から、19世紀中ごろのイギリスの旅行者ならほぼ間違いなく立ち寄ったとされる (Payne 80)。

この家の新しい家主アンドルー・クレイギーはボストンに生まれ、ボストンのラテン語学校で教育を受けたが、医学・薬学関係の知識はどこで得たのか、成人後はその分野で頭角を現す。すなわち大陸軍に身を投じ、75年のバンカー・ヒルの戦いで傷病兵の治療に従事し、その後にアメリカで最初の薬剤将校 (Apothecary General) に

就任するのだ。そして79年中佐に任官、83年除隊する。この間、政府証券の購入と投機行為によって巨富を得、退役後も土地投機や事業に精力的に関与する。顕著な例をあげれば、東ケンブリッジにおける広大な土地の購入や、合衆国銀行とオハイオ・カンパニーにおける取締役就任がある。そしてオハイオ・カンパニー時代の1809年、チャールズ川に、ボストンと東ケンブリッジのレッチミア・ポイント (Lechmere Point) を結ぶ“運河橋(Canal Bridge) ”、あるいは“クレイギー橋(Craigie's or Craigie Bridge) ” を架けている (Green 323, 342)。

詩人ロングフェロー (Longfellow) は詩集『ブルージュの鐘楼と他の詩』(*The Belfry of Bruges and other Poems*. 1845) に「橋 (The Bridge) 」という詩を載せているが、この「橋」こそクレイギーが建設した木橋 “クレイギー橋 ” である。その第一スタンザはこうである。

I stood on the bridge at midnight,	深夜 橋上に立ちぬ
As the clocks were striking the hour,	時鐘 時を告げしときに
And the moon rose o'er the city,	月 街上に登りぬ
Behind the dark church-tower.	薄暗き教会塔の背後に。

クレイギーはこの屋敷の購入後、庭園の設計・施行を行うとともに温室と氷室を増築し、「クレイギー城 (Castle Craigie) 」とも俗称される「クレイギー邸 (the Craigie Mansion or House) 」を造りあげ、豪商たちの社交場とする。

1793年1月、クレイギー49歳のとき、21歳の美女エリザベス・ナンシー・ショー (Elizabeth Nancy Shaw) を娶る。ショー嬢はマサチューセッツ沖、コッド岬南方のナンタケット (Nantucket) 島の牧師の娘で、当時、ある若者と婚約中であったのだが、若者が財を求めて海上に出ている間にクレイギーに嫁入ったのである。その直後に例の若者から便りが来て、親族の死亡で相当な財産を引き継ぐことになったから即刻帰る、ということであった。だが万事休す。若者は失望から破滅したという (Dana, "The Craigie House" 35)。ショーは結婚後、派手に振る舞い、贅にふけり、財貨で威信を保ち、まもなくクレイギーに疎まれるようになる。

クレイギーは1796年、ケンブリッジのクライスト・チャーチの学寮長を務めたが、その後に急転直下、恐るべき暗転の日々が来る (Green 343)。投機に失敗し、大負債を抱え、逮捕におびえる日々となったのだ。その苦悩から開放されたのは1819年9月19日、永眠によってで、亡骸はハーバード・スクエア近くの旧墓地 (Old Burying Ground) にあるヴァッサル家墓所に埋葬された。妻には一代限りの地所権利 (生涯権) を残したが、大負債も残したために、彼女は屋敷周辺の土地を売却し、自宅に間借り人を受け入れ、自分は階上北西奥の部屋を寝室として逼塞する身となる。

2 ロングフェロー

ヘンリ・ウォズワース・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow, 1807-82) はマサチューセッツ州ポートランドの出身で、大学教育は同州ブランズウィック (Brunswick) のボウドウン・カレッジ (Bowdoin College) (1822 - 25在学) で受け、このときナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorn) が級友であった。もっとも、ポートランドやブランズウィックは1820年以後マサチューセッツ州から分離したメイン州 (Maine) に所属する。

ロングフェローは大学卒業後の1826年から29年まで、ヨーロッパに滞在し、フランス語、スペイン語、ドイツ語の知識を習得する。帰国後の29年、母校ボウドウン・カレッジで教授職を得、31年にメアリ・ストーラ・ポター (Mary Storer Potter) と結婚する。35年、マサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード・カレッジ (Harvard College) に移籍し、同年再び欧州へ勉学の旅に出る。そして数ヶ月後の3

5年10月、妻がオランダで流産し、翌月ロツテルダムで長逝する。

翌36年夏、ロングフェローはスイスにいたが、ここでボストンの富裕商人ネイサン・アブルトン(Nathan Appleton)一家と邂逅する。アブルトンには19歳になる娘ファニー・アブルトン(Fanny Appleton, 正式には Frances Elizabeth Appleton, 1817-1861)があり、ロングフェローはこの娘に魅せられる(Wagenknecht Longfellow 220)。そして3年後にかれは、ファニーをヒロインのモデルとする散文物語『ハイペリオン』(*Hyperion*, 1839)を創作する(Johnson q.v. Longfellow)。

1836年12月、かれは欧州留学から帰国してハーバード・カレッジの教壇に立つ。翌37年5月、クレイギー・ハウスの階上の「美しい大部屋2室」間借り人が何人か入れ替わったあとのことだが を借り受け、8月に入居する。その「2室」とは、通りから見て右側(南西)正面の部屋 ジョージ・ワシントンがかつて私室とした とその奥の部屋で、これらをそれぞれ書斎と寝室としたのだ(Longfellow 1: 253)。³ 1840年初めには、正面から見て左側(南西)の部屋も、間借り人が去ったあと、居間(または食堂)として借用する(図版2)。かれはこのとき独身であったから食事と部屋の手入れはクレイギー夫人雇用の農夫の妻がした(Payne 123-124; Longfellow 1: 262-265; Dana, "The Craigie House" 14; Dana, "Longfellow and Dickens" 65; Wagenknecht, Longfellow 5; Johnson q.v. Andrew Craigie; Garraty q.v. Longfellow; Americana q.v. Longfellow)。

3 クレイギー夫人の死

クレイギー夫人は、風変わりな女性と噂されながらも細々と生き続けるが、永眠の日が来る。1841年5月5日のこと、享年69歳(Holmes 404)。夫の墓には入らず、新設のオーバーン山墓地(Mount Auburn Cemetery)の一角、シーダ通り(Cedar Avenue)に地所を得、そこに円筒形のギリシャ式祭壇のモニュメントを建て、祭壇に花網飾りのような垂れ布の彫刻を施すとともに、最愛の文人ヴォルテールの一文「炎が立ち上がるように、すぐれて重要な原理は神に立ち昇る」を銘刻し、祭壇上には炎形の彫刻物を載せる。だがモニュメントには氏名、生死年月日、十字架、宗教的碑文はない(Dana, "The Craigie House" 37-38; Footnotes 23)。あの世で牧師の父とうまく再会したであろうか。

彼女の死後、蔵書と家具はクレイギー・ハウス内で競売にかけられる。競売用の蔵書カタログは約500項目からなり、そこに多数のフランス語の古典が含まれたという。間借り人のロングフェローはその中から75巻本のヴォルテールの著書を購入している(Dana, "The Craigie House" 38)。

4 ジョウゼフ・エマソン・ウスター

ジョウゼフ・エマソン・ウスター(Joseph Emerson Worcester, 1784-1865)はニューハンプシャー州ベッドフォード(Bedford)に生まれたが、94年10歳のとき、両親に連れられて両親の生地ニューハンプシャー州ホルリス(Hollis)に移る。父が農場を営んだ関係で21歳まで家業を手伝ったが、その年にマサチューセッツ州アンドウバー(Andover)のフィリップス・アカデミー(Phillips Academy)に入学し、25歳のときイェール・カレッジ(Yale College)の第2学年に入学、1811年に卒業する。卒業後5年間はマサチューセッツ州セイレム(Salem)で私立学校の教壇に立ち、ナサニエル・ホーソンの師となる。その後2年間はアンドウバーで過ごし、19年にケンブリッジに転居・永住する。この間に『地理学事典』(*A Geographical Dictionary*, 1817)を著し、その後も同分野の出版物を出し、それらすべてが教科書として広範に採用される。28年に言語辞典に転じて『トッドの改善・チャーマーズの要約によるジョンソン辞典にウォーカーの発音辞典を結合せる辞典』(*Johnson's English dictionary, as improved by Todd, and abridged by Chalmers: with Walker's*

pronouncing dictionary, combined; ...)、29年にウェブスターの『アメリカ英語辞典』の要約辞典、30年にかれ独自の『総合発音解説英語辞典』(*A Comprehensive Pronouncing Dictionary of the English Language*)をそれぞれ著す。だがこの最後の辞典こそ、ウェブスター側から剽窃書と叩かれるのであり、以後34年間、ウスターはノア・ウェブスターらを向こうに回して“辞書戦争”を闘う運命にある。

興味深いことに、ウスターはクレイギー・ハウスの間借り人だったのだ。いつごろ入居したかは定かでないが、ロングフェローがこの家の間借り人となった1837年、父宛の手紙の中でウスターに言及しているから、この時すでにこの家の住人であった可能性がある。

クレイギー夫人は先述のように1841年5月に死亡するが、ウスターは彼女の死の直前、屋敷の1年間の借用契約を彼女の相続人たちと結ぶ(*Longfellow 1: 377*)。この契約により、ウスターは同居人ロングフェローに屋敷の半分を賃貸(又貸)しすることになる。そして6月、かれは元ハーバード大学教授の娘エイミ・E・マキーン(*Amy Elizabeth McKean*)と結婚し、44年4月まで居住するが、同月、クレイギー夫人所有の土地を購入して家屋を新築し、転居する(*Hilen 3: 33; Dexter 432-437; Johnson q.v. Worcester; Garraty q.v. Worcester*)。

5 クレイギー・ハウスの新所有者

1843年7月ロングフェローは、前述の、スイスで知り合ったファニー・アブルトンと再婚する(*Longfellow 2: 1; Wagenknecht, Longfellow 220-221*)。そして夏期休暇中の10月、かれらが新婚旅行に出かけている間に新妻の父ネイサン・アブルトンが、クレイギー・ハウスとその隣接地5エーカーが売却に出されたのを機に購入し、娘夫婦に結婚祝いとして贈与する(*Hilen 2:425, 3:33; Longfellow 2: 2-3; Americana q.v. Longfellow*)。こうしてクレイギー・ハウスはロングフェロー・ハウスとなる。

ロングフェローはこの家に多くの客人を招く。それらの中にナサニエル・ホーソン、ラルフ・ウォルド・エマソン(*Ralph Waldo Emerson*)、オリヴァ・W・ホウムズ(*Oliver Wendell Holmes*)、ジェイムズ・R・ロウウェル(*James Russell Lowell*)、チャールズ・サムナー(*Charles Sumner*) (政治家で奴隷廃止論者)らがあり、これらの人々はここでワインを酌み交わしながら談論風発に時を費やしたという(*Americana q.v. Longfellow*)。ロングフェロー・ハウスはアメリカ文学勃興期の“梁山泊”だったのだ。

6 チャールズ・ディケンズ

チャールズ・ディケンズ(*Charles Dickens*)は二度訪米している。第一回は、1842年1月4日、リヴァプール港から蒸気船ブリタニア号(*the SS Britannia*)に乗船し、1月22日午後5時、ボストン港に入港する。その日から2週間、イギリスの新進作家として日々大歓迎を受けるのだが、ボストンでの最終行事日となった2月4日、かれの行動は以下のように詳細に記録に残されている。

午前9時半、ハーバード大学のギリシャ語教授で、のちに学長となるコーネリアス・フェルトン(*Cornelius C. Felton*)がディケンズの滞在ホテル、トレムモント・ハウス(*the Tremont House*)に迎えに来る(図版3と後述の図版説明参照)。⁴ ふたりはトレムモント通り(*Row*)、コート通り(*Court Street*)を経てボウドウン広場(*Bowdoin Square*)に行き、ここで乗車賃25セントの、ボストンとケンブリッジ間を結ぶ唯一の公共輸送機関、ケンブリッジ1時間周遊のモース(モールス)の乗り合い馬車(*Morse's stage*)に乗る。⁵ 馬車はケンブリッジ通り(*street*)、チャールズ川の西ボストン橋(*West Boston Bridge*)、ケンブリッジポート村(*the village of Cambridgeport*)、ダイナ・ヒル(*Dana Hill*)、オールド・ケンブリッジ村(*the village of Old Cambridge*)を過ぎ、当時“ビレッジ(*Village*)”と呼ばれたハーバード広場

(Harvard Square)に着く(図版4, 5、及び図版説明参照)。馬車を降りると、ディケンズの到着を知らされていた学生集団に取り囲まれる。次いで、ブラトル通り(Brattle Street)を西に進むと、槌音のひびく“村の鍛冶場(the Village Smithy)”が左手にある。勤勉な鍛冶屋デクスター・プラット(Dexter Pratt)こそ、ロングフェローが「村の鍛冶屋」(*The Village Blacksmith*. 1841)で詠ったその人である。

Under a spreading chestnut-tree
The village smithy stands;
The smith, a mighty man is he,
With large and sinewy hands;
And the muscles of his brawny arms
Are strong as iron bands.

枝を広げし栗木の下に
村の鍛冶場が佇みて；
強き^男の鍛冶屋あり
両手おおきく筋骨太く、
硬き腕筋肉
鉄のたがの^{よう}なり。

ここを通り過ぎ、ブラトル通りをなお行くと、右手に植民地時代風の、黄色と白の古びた屋敷が見える。それがクレイギー・ハウスで、門前にロングフェローと宗教学(Sacred Literature)の元教授アンドルーズ・ノートン(Andrews Norton)が待ち構えている。すぐに朝食が始まったことだろう(Payne 123-124; Rossiter 27; Wagenknecht, *Longfellow* 67; Dana, "The Craigie House" 23; Dana, "Longfellow and Dickens" 57, 62-63)。

この朝食会に上記以外の人物が同席したかどうかは分からない。だが、少なくとも辞書学者のウスターが同席していた、と見るべきだろう。ウスターは当時この邸宅の住人であり、同時に邸宅の借受人でもあり、さらにロングフェローの家主でもあったのだ。またこのとき、かれはウェブスター辞書と雌雄を決する“辞書戦争”の渦中であつたのであり、そのためにかれはハーバード大学やマサチューセッツ住民の応援を受けていたのだ。そのような重要人物が、ロングフェローや、朝食に同席したハーバード大学の教授たちによってディケンズに紹介されなかったとは考えられないだろう。他方、ディケンズとしても当時29歳、作家として円熟味を増してきたときで、ウスターほどの“時の人”に無関心でいられるはずがないのだ。二人は同席したに違いない。そしてこれが機縁となつて、後述のように、ウスターは1860年完成の『英語辞典』をディケンズに献呈したのだろう。

朝食後、ディケンズはロングフェローによってハーバード大学に案内され、その後ライブラリーで、ケンブリッジの名士たちの主宰するディケンズ小歓迎会に参加する。散会后、かれは馬車でボストンの宿泊先トレムモント・ハウスに戻る。午後は裁判所庁舎(Court House)へ赴き、市の裁判を15分足らず傍聴して『アメリカ印象記』(*American Notes*)の2頁分の資料を得る。これでかれのボストンの行事はすべて消化されたのだ。翌2月5日、ディケンズ一行はつぎの訪問地マサチューセッツ州ウスターへ向けて汽車で移動する。

ボストンの鉄道は当時、ボストンを起点とする四つの路線があつた(図版6、及び図版説明参照)。すなわち、一、1834年開通のボストン・プロヴィデンス間を結ぶボストン・プロヴィデンス鉄道(Boston and Providence Railroad)、二、1835年開通のボストン・ロウエル間26マイルを複線軌道で結ぶボストン・ロウエル鉄道(Boston and Lowell Railroad)、三、やはり1835年開通のボストン・ウスター間45マイルを単線で結ぶボストン・ウスター鉄道(Boston and Worcester Railroad)、四、1837年か38年開通の全長71マイルに及ぶイースタン鉄道(Eastern Railroad)である(Rossiter 18-24; Harlow 108, 87, 97, 151)。⁶

これら四つの路線のボストン駅はそれぞれ異なる場所にあり、ディケンズ一行(ディケンズ、妻キャサリン・ホガース、メイドのアン・ブラウンの3人)が向かった駅はビーチ通り(Beach Street)とニーランド通り(Kneeland Street)の交差点にあるウ

スター鉄道ボストン駅である（図版 7, 8、及び図版説明参照）。駅には“5人クラブ”のメンバーやボストンの友人たちが待ち構えており、互いに別れを惜んでいる（Payne, 126-27; Dana, "Longfellow and Dickens" 62-64）。

それから4半世紀後の1867年、ディケンズは第2回渡米を行い、11月19日にボストンを再訪して「朗読旅行（reading-tour）」を開始する。ボストンには12月7日までの3週間滞在し、宿泊ホテルは、スクール通り（School Street）に面した1855年オープンのパーカー・ハウス（Parker House [Hotel]）である（図版3及び図版説明参照）。この間、感謝祭の日（11月28日）にかれは、ロングフェローによってあの懐かしい旧クレイギー邸（ロングフェロー邸）に招待され、正餐にあずかる。同席者はロングフェロー、ロングフェローの妹アン（Ann Longfellow Pierce）、ロングフェローの娘3人（Alice, Edith, Annie Allegra）、次男アーネスト（Ernest）とその許婚者（Miss Harriet Spellman）の6人で、妻ファニーは後述のように61年に悲劇的な死をとげて存命していない（Dana "Longfellow" 88-90, Payne 142-204）。

7 再びウスター

上述のように、ウスターとウェブスターの辞書戦争の発端は1830年で、クレイギー夫人の死は41年、ディケンズの第1回ボストン訪問は42年、ウスターの新築移転は44年である。そしてウスターは46年に『普遍決定的英語辞典』（*A Universal and Critical Dictionary of the English Language*）を出版するが、これがまだ印刷途中にあったとき、かれは白内障に冒されて失明の危機に瀕する。このために2年間研究はとん挫することになるのだが、その間に右目の手術を3回、左目を2回行い、結局、右目はほぼ失明、左目はかろうじて救われることになる。そして47年と49年に、先に剽窃本と非難された『総合発音解説英語辞典』の増補改訂版をそれぞれ出し、55年にこれを『英語発音解説同義語辞典』（*A Pronouncing, Explanatory, and Synonymous Dictionary of the English Language*）と改題する。

この間の51年、ロンドンの節操に欠ける出版者が前記『普遍決定的英語辞典』の表題をわずかに変え、さらにボストンの出版者たちとの協定も無視して「法学博士ノア・ウェブスターの資料から編纂された」の虚偽の一文を表題に挿入して再出版する。これがウスターを一層の苦境に陥れたことは想像に難くない。だが1860年、多くの有能なアシスタントに支えられ、ライフワークとなる『英語辞典』（*A Dictionary of the English Language*）を完成する。ウスター、76歳のときで、かれはこれを著名な文化人に献呈する。その中にトマス・カーライル、ウィリアム・M・サッカレイ、チャールズ・ディケンズらが含まれることは小稿「ウスター編『英語辞典』とディケンズ」（『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第26号所収）で論述した通りである。⁷ それから5年後の65年10月、かれは81歳で他界する。夫婦の間に子どもはいない。

ウスターは『英語辞典』の出版でウェブスター辞典より優位に立つが、それはつかの間のこと、1864年にグッドリッチとポーターが、ウェブスター『アメリカ英語辞典』の増補改訂版を完成したことで立場は逆転し、辞書戦争は終結する。

8 ロングフェローの妻と長男

ロングフェローは1843年に再婚した妻ファニーとの間に6人の子ども（Charles, Ernest, Frances, Alice, Edith, Anne Allegra、ただし Frances は早世）に恵まれ、幸せな日々を送る。だが波乱は人の世の常。61年7月9日、妻が、二人の娘の巻き毛を切って小包に入れ、封蝋で封をしているときのこと、床に落ちたマッチの火が夏着に燃えうつる。一瞬のうちに炎に包まれ、助けを求めて隣室の夫の腕の中に飛び込むが、時すでにおそく、翌日不帰の客となる。享年43歳（Longfellow 2: 369; Dana "Longfellow and Dickens" 89; Wagenknecht, *Longfellow* 220, 252; *Encyclopaedia*

Britannica q.v. *Longfellow*)。

ロングフェローの長男チャールズ (Charles, 1844-1893) は活力に満ちた人であった。1863年、19歳のとき、第1マサチューセッツ騎兵隊に所属して南北戦争 (1861 - 65) に従軍し、その後は世界漫遊の旅に出る。その間、アジア文化、特に日本文化に魅せられ、横浜に洋館を建てて住み着く。故郷のケンブリッジへは頻りに帰郷していたが、帰郷中の93年、生家のロングフェロー・ハウスで死亡する (*Footprints* 14) 。

9 ロングフェロー・ハウスの今

クレイギー・ハウスは、クレイギー = ロングフェロー・ハウス、ヘンリ・ウォズワース・ロングフェロー・ハウス、ヴァッサル・クレイギー・ロングフェロー・ハウス (Vassall-Craigie-Longfellow-House) などと呼ばれるが、1972年以来「ロングフェロー国立史跡 (the Longfellow National Historic Site) 」とされ、国の公園局の管理下にある。現在地は 105 Brattle Street, Cambridge, MA 02138, U.S.A.

ちなみにこのハウスが位置するブラトル通り (Brattle Street) には史跡が多く、つぎのものを含めて今日も保存されている。

The Dexter Pratt House, 54 Brattle Street, Cambridge, Massachusetts 02138, U.S.A.
Joseph Worcester House, 121 Brattle Street, Cambridge, Massachusetts 02138, U.S.A.

10 図版

(a) 図版出典

図版 1 *The Dickensian* Vol. LII. No. 319 (1955). 図版 2 Payne 124f. 図版 3、4、6 Krieger and Cobb 193, 211, 123 の地図を参考に筆者作図。図版 5 *Footprints on the Sands of Time* Eastern National Park and Monument Association 1996. 図版 7 Rossiter 22. 図版 8 Harlow 146f.

なお、以下の図版は () 内に示した資料で見られる。

Craigie's Bridge (1910 年以来 Charles River Dam) (Haglund 382)

Mrs. Craigie の肖像画と墓標 (Tomb)、および H. W. Longfellow による “Sketch of the Village Smith, Cambridge” (Dana “The Craigie House” 34f, 38f. 22f.)

(b) 図版説明

図版 3 (Krieger and Cobb 193) は 1826 年の詳細なボストンの地図で、これを参考に筆者がの位置を特定した。 Tremont House. Tremont Row. Court Street. Bowdoin Square. Cambridge Street. Court House. School Street.

図版 4 (Krieger and Cobb 193) は 1874 年のケンブリッジの地図。筆者の図で右端下に West Boston Bridge. 左上の黒く示した線は Brattle Street. この通りの右先端の四角い空間は Harvard College (or Harvard Yard).

図版 5 Harvard Square. Blacksmith House. Vassall-Craigie-Longfellow House. Joseph Worcester House.

図版 6 (Krieger and Cobb 123) は 1846 年のボストンの地図。筆者の図で、橋を言えば、北東から北西、南へと順に Charles River Bridge (1786); Warren Bridge (1828); Canal (Craigie's) Bridge (1809); West Boston Bridge (1793) (1907 年に付け替えられて Cambridge Bridge 。 1927 年に Longfellow Bridge と改名)。駅は Boston and Maine Railroad (1843); Boston and Lowell Railroad (1835); Boston and Providence Railroad (1834); Boston and Worcester Railroad (1835); Old Colony Railroad (1845). 1846 年の地図では と の線路は駅近くでつながっているように見えるが、1862 年の地図では明確に分離している。

図版 7 ディケンズ一行が向かった Boston and Worcester Railroad Station.

図版 8 1839 年ごろの銅板刷りで、Boston and Providence Railroad のボストンに向かう汽車。この線路はもう少し先の Back Bay で Boston and Worcester Railroad の線路と交差する。左端下方

に、やや判別しにくいですがボストンからウスターへ向かう汽車が見える。

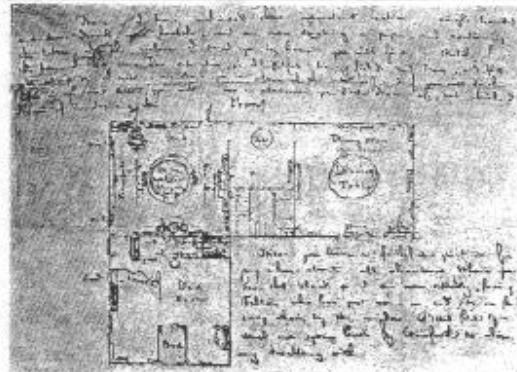
(c) 図版

1



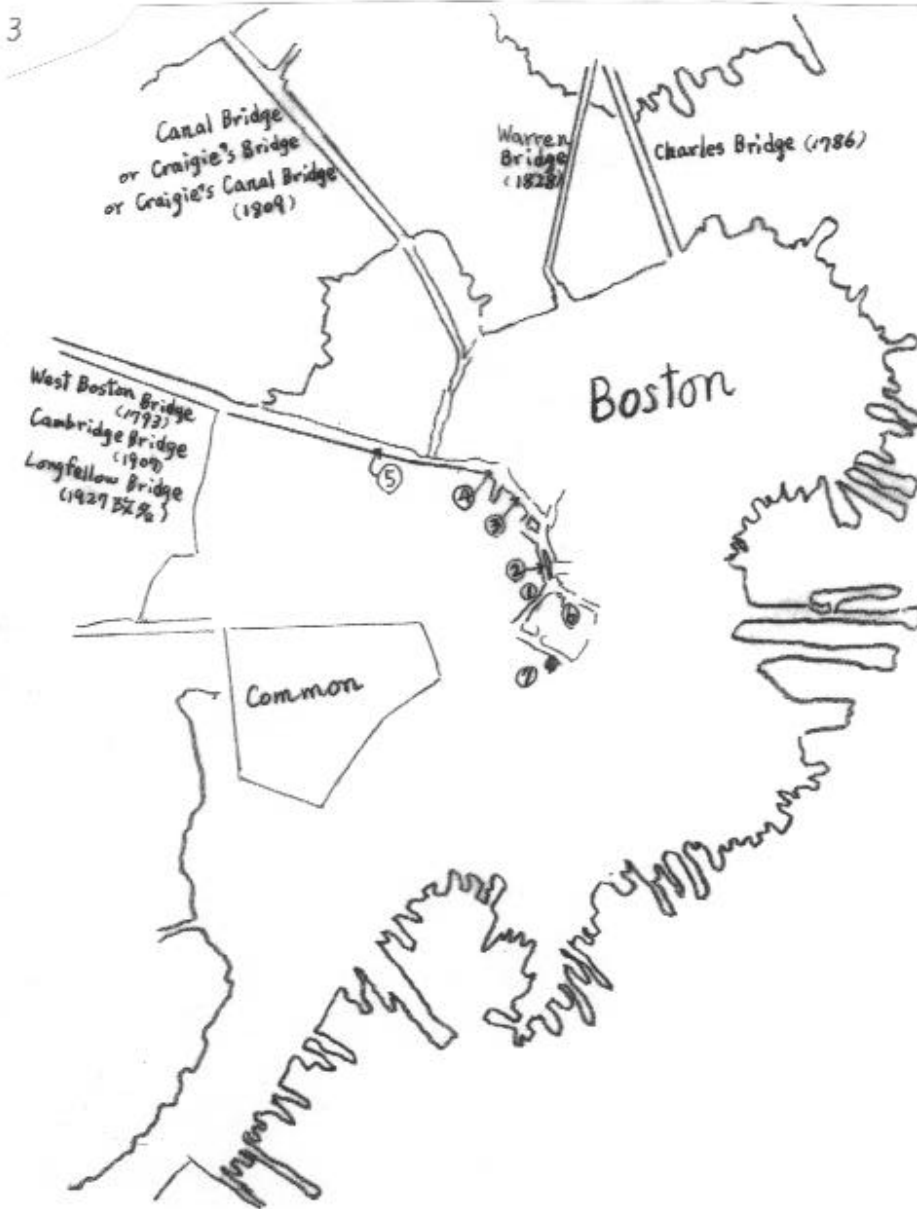
Longfellow's home, Craigie House, Cambridge, Mass.
Here Dickens breakfasted with the poet on Feb. 27th, 1842.

2

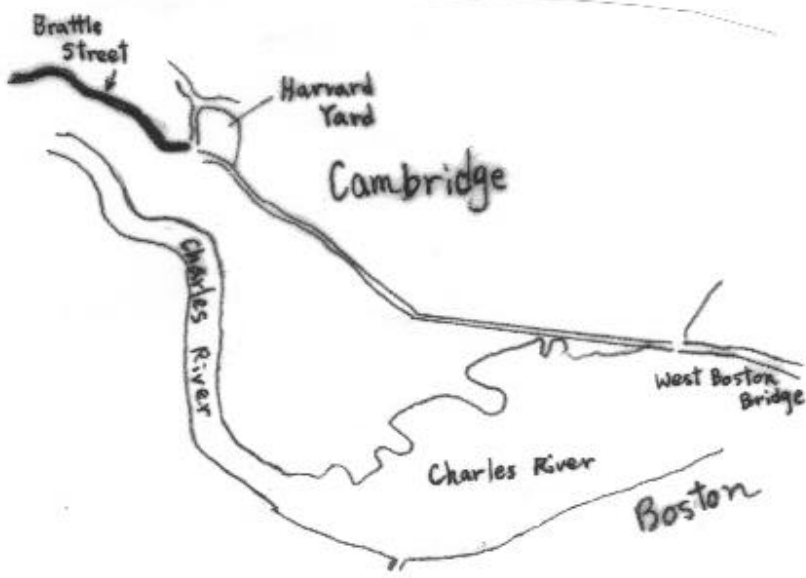


LONGFELLOW'S PLAN OF HIS ROOM AT CRAIGIE HOUSE IN A LETTER TO GEORGE W. GREENE
Showing the arrangement of furniture which Dickens breakfasted there

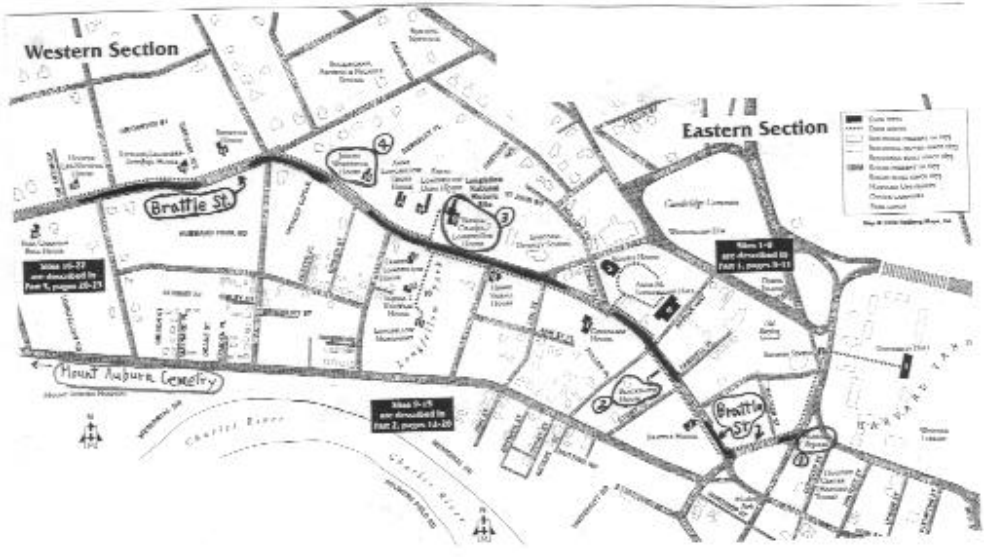
3



4



5



6



7



BOSTON AND WORCESTER RAILROAD STATION

8



Boston in 1840: Boston & Providence train in foreground, Boston & Worcester train at left.

謝辞

資料収集等で次の方々にお世話になりました。記して謝意を表します：Anita Israel (Cambridge)、Roxane Coombs (Cambridge)。

注

本稿はディケンズ・フェロウシップ日本支部2002年度秋期大会(10月5日、於甲南大学)における口頭発表(「エクセルシア考 ディケンズとロングフェローの一接点」)で一部言及したものです。

- 1 ラッセルはのちに合衆国ブランチ銀行の初代会長に就任する(Green 319)。
- 2 アンドルー・クレイギーの生年は1754年2月22日とする説がある(Holmes 403)。また、クレイギーの屋敷と地所の購入年は1791年、1793年とする説もある(Footprints 13; Johnson q.v. *Andrew Craigie*)。
- 3 「ワシントンが私室とした部屋」の下にクレイギー夫人の居間(parlor)がある(Dana, "The Craigie House" 14)。
- 4 トレムモント・ハウスは1829年オープンの名門ホテルで、ディケンズは『アメリカ印象記』(*American Notes*)でこのホテルのことを書いている(Payne 15)。
- 5 モースの馬車(Morse's stage)は当時'the hourly'と呼ばれた。
- 6 イースタン鉄道(Eastern Railroad)は、客車をボストンの中央海岸通り(the central waterfront)のコマーシャル通り(Commercial Street)から、チャールズ川を隔てた東ボストン(East Boston)までフェリーポートで渡した。またこの鉄道は1847年までにポートランド(Portland)まで延伸されて全長110マイルとなる(Rossiter 18)。

ボストンとメイン間の71マイルを結ぶボストン・メイン鉄道(Boston and Maine Railroad)の開通は1843年、ボストンとフィッチバーグ間の49マイルを結ぶフィッチバーグ鉄道(Fitchburg Railroad)の開通は1845年、ボストンとフォール・リヴァー(Fall River)間を結ぶオールド・コロニー鉄道(Old Colony Railroad)の開通は1845年である(Rossiter 18, 21, 24; Harlow 216)。

蛇足ながら、鉄道が急速に発展した背景にボストンの人口急増がある。1830年のボストンの人口は6万1400、40年9万3383、47年13万、50年13万6881(内46パーセントは移民)である(Krieger & Cobb 124, 244)。ディケンズは67年にボストンを再訪したが、その時の変容振りを、長女メアリへの書簡(1867年11月21付)でこう記している：'The city has increased enormously in five and twenty years. It has grown more mercantile—is like Leeds mixed with Preston, and flavoured with New Brighton; but for smoke and fog you substitute an exquisitely bright light air.' (Storey, Graham, ed. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 11. Oxford: Clarendon Press, 1999, 480)

- 7 ロングフェローがディケンズ宅に滞在していた1842年10月5日から10月20日までの2週間内に、ディケンズの2巻本の*American Notes*が出版社からディケンズ宅に届いている。ディケンズはこの内の一冊に献辞“H. W. Longfellow / From his friend / Charles Dickens / Nineteenth October 1842”を記してロングフェローに差し出すと共に、同じ献辞をつけた同書をアメリカの友人たち(8人以上)に渡してくれるようロングフェローに託している。ダイナの論文には8人の名が記されているが、その中にウスターの名はない(Dana, “Longfellow and Dickens” 74-75, 77)。

参照文献

- Crawford, Mary Caroline. *Old Boston Days & Ways*. Boston: Little, Brown, and Company, 1924.
- Dana, Henry Wadsworth Longfellow. "The Craigie House: The Coming of Longfellow." Reprinted from the Proceedings of the Cambridge Historical Society. 1939.
- - - . "Longfellow and Dickens: The Story of a Trans-Atlantic Friendship." *Cambridge Historical Society*. 28 (1943): 55-104.
- Dexter, F. B. "Joseph Emerson Worcester." *Biographical Sketches Graduates Yale College*. Vol. VI (1912).
- The Dickensian*. 52 (1955): 7-19.
- Encyclopedia Americana*. New York. 1966 ed.
- Encyclopaedia Britannica*. Chicago, etc. 1966 ed.
- Footprints on the Sands of Time. Longfellow's 19th Century Cambridge: A Walking Guide*. Eastern National Park and Monument Association. 1996.
- Garraty, John A. and Carnes, Mark C. ed. *American National Biography*. New York and Oxford: 1999.
- Green, Samuel Swett. "The Craigie House, Cambridge." *American Antiquarian Society*. (April, 1900): 312-352,
- Haglund, Karl. *Inventing the Charles River*. Cambridge & London: The MIT Press, 2003.
- Harlow, Alvin F. *Steelways of New England*. New York: Creative Age Press, 1946.
- Hilen, Andrew, ed. *The Letters of Henry Wadsworth Longfellow*. Cambridge: Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1966-1982.
- Holmes, John. "Andrew Craigie." *The Colonial Society of Massachusetts*. (April, 1902): 403-407.
- Johnson, Allen, ed. *Dictionary of American Biography*. New York: Charles Scribner's Sons, 1964.
- Krieger, Alex and Cobb, David, ed. *Mapping Boston*. Cambridge and London: The MIT Press, 1999.
- Longfellow, Samuel. *Life of Henry Wadsworth Longfellow*. Boston: Ticknor and Company, 1886, 2 vols.
- Payne, Edward F. *Dickens Days in Boston*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1927.
- The Poetical Works of Longfellow*. Boston, etc.: Houghton Mifflin Company, 1975.
- Rosssiter, William S., ed. *Days and Ways in Old Boston*. Boston: R. H. Stearns and Company, 1914, 1972.
- Worcester, Samuel T. "Graduates of Yale College. Joseph E. Worcester, L. L. D." *History of the Town of Hollis, New Hampshire, From its First Settlement to the Year 1879*. Nashua, N.H.: Press of O. C. Moore, 1879. 297-300.
- - - . "Joseph E. Worcester, L. L. D." *The Granite Monthly*. 3.7 (April, 1880): 245-252.
- Wagenknecht, Edward. *Longfellow: A Full-Length Portrait*. New York: Longmans, Green & Co., 1955.
- - - . "Dickens in Longfellows [sic] Letters and Journals."